

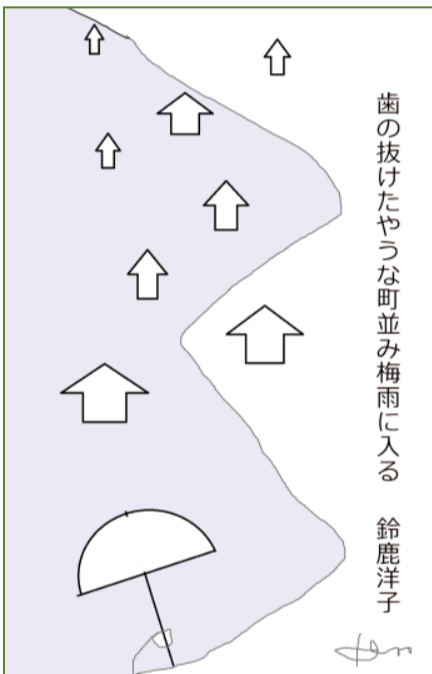
■今月の特選句



駅員の白き手袋夏燕

桑田愛子

駅員さんの白手袋が出発進行と指す方角に夏燕がすいすいと飛んで行く。緑したたる山を背景にした田舎の駅だろう。気持ちのいい風を感じる。



歯の抜けたやうな町並み梅雨に入る

鈴鹿洋子

人口が減少しつつある元気のない町である。「歯の抜けたやうな」になんとも言えない寂しさが滲む。「梅雨に入る」に陰鬱さもよく出ている。



ストライクボールの声も汗をかき

遠藤真太郎

草野球か高校野球か。この「汗」から緊迫感が伝わってくる。審判の声だろうが、「声が汗をかく」としたところがいいね。詩のある表現である。

■今月の特選句



たたかれて熟してゐると言ふ西瓜

森岡香代子

客が入れ替わり立ち替わりして叩いていく。音で熟れ具合を知ろうとするのだが西瓜にしてみればたまったもんじゃない。もう大概にしてくれい。



どの子にも愛を等しく軒つばめ

柳 紅生

「どの子にも愛を等しく」で人間のことかと思わせておいてタネ明かし。親鳥の立場になりきったから詠めた。「愛を等しく」の理屈っぽさもいいね。



空を掻く今際の時の蝉の脚

渡部美香

落ち蝉が仰向けになり、脚を胸に集めるようにして何かを掴もうとしている。地上に出たからは短い命だが、最期の瞬間まで生きていようとする。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

洗濯物から煙出そうな炎暑かな ・・・火事になったら疑われるぞ	田村米生
蚊帳の内一等席と横になり ・・・これ見よがしに蚊にあてつけを	山下正純
かき氷に二本の小匙老夫婦 ・・・ひと匙ごとににつこり笑ひ	南とんぼ
これからぞ苦勞の足りぬ今年竹 ・・・去年の竹をしつかり見習へ	村松道夫
何よりも風が喜ぶ青簾 ・・・風鈴さんもはしやぎにはしやぎ	八塚一青
かまきりの忍者のごとく忍び足 ・・・どたどた歩く太足もたず	田中 勇
田をやめれば春も秋もないただの人 ・・・あとに残るは夏と冬だけ	鈴木和枝
子子の明日飛ぶためのストレッチ ・・・さらに鍛えよスクワットして	峰崎成規
テレワークとどのつまりの無人島 ・・・本社そのうち火星に移転	池田亮二
あぢさゐの色に酸性反対派 ・・・中立の派は白を選ぶか	大林和代
今宵こそ刺し違えむと蚊の喰り ・・・ゆんべの恨み晴らす執念	田中やすあき
じょうろからしろがねのみずつりしのぶ ・・・つりしのぶとてのどがかわくか	山本 賜
両方の乳房潰して西瓜抱く ・・・潰されたとてはね返すわよ	井口夏子

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

ひとしきり暴れてさりぬ大夕立	相原共良
子は腰を鍛えてをりにけり	相原共良
ただいまと鉢の金魚にグータッチ	相原共良
暑さより値上げラッシュで夏瘦に	青木輝子
人の世のどこにもうるさい蠅がいる	青木輝子
羽抜鶏日ごと存在薄くなり	青木輝子
父の日を誰も知らない情けない	赤瀬川至安
虎が雨飛車を斬らせて角を守る	赤瀬川至安
どくだみ茶ただより怖い物はなし	赤瀬川至安
点滴の一滴二滴向日葵(サンフラワー)	荒井 類
蜘蛛の囿にかかりてもがく蜘蛛のをり	荒井 類
節電にクーラー切って救急車	荒井 類
トンネルを掘って崩れたかき氷	井口夏子
風鈴のしきりに鳴るや反戦歌	井口夏子
所により金も降るなり夏ボーナス	池田亮二
スローライフのカルチャー教室あくび指南	池田亮二
蝦夷梅雨や晴れ男たち女たち	石塚柚彩
峠路にひよいと真夏のきたきつね	石塚柚彩
富良野メロンかぶりつく子と嫌がる児	石塚柚彩
打たないで蛇が手をすり足をする	伊藤浩睦
卵の花や徂徠豆腐をふと思ふ	伊藤浩睦
梅雨昏し昼行燈の要りさうな	伊藤浩睦
ロシアより無償の愛を渡り鳥	稲沢進一
墓洗ふ国栄えても民貧し	稲沢進一
人生は行き当たりばつたり兜虫	稲沢進一
コンサートの賑はひ何処夏の原	稲葉純子
乱舞の螢に真闇ますます迫り来る	稲葉純子
大粒の涙は溢れんばかり梅雨の空	稲葉純子
振花や品良く振れ喜寿となる	井野ひろみ
往来の青柿を置く石の上	井野ひろみ
美容院いそいそ出掛く避暑地かな	井野ひろみ
絵のやうに見るギザギザの稲光	上山美穂
紫蘇を食ふ虫紫蘇が好きらしい	上山美穂
夏の庭食物連鎖の見え隠れ	上山美穂
瀬戸の海水母ぶかりと透きとほる	梅野光子
赤とんぼ物干竿にとまりたい	梅野光子
梅雨の明け飛行機雲の一直線	梅野光子

電化の進歩が地球狂わせ熱帯夜
 川狩やマングローブをかき分けつ
 仙女にも魔女にもなれず生ビール
 涼しさや壁がふうつと息したる
 蛸づくし食べて踊るや半夏生
 鮮やかや俳句とコラボの赤い薔薇
 梅雨明は疾うに過ぎたに蝉はまだ
 葉に羽を横たへ蝶の昼寝かな
 雲の峰空の掃除の泡ならむ
 通学鞆ビーチサンダル隠してる
 音はせず電車の窓の大花火
 夜更かしの子ら甚兵衛が嬉しくて
 墓参の子水をかけ合ふてふ遊び
 受験生三年やりてモスラかな
 武者人形怖くて布団に勢力図
 玉の汗たまにはかきたい持病持ち
 宅配を使いひとつもかかぬ汗
 慰霊の日摩文仁(まぶに)の海の波ゴウゴウ
 姫百合部隊語り継がれよ千年
 家売って薔薇を買いたし画家なれば
 真直ぐに列は進まぬ蟻の列
 説明のつかぬ恋ならかき氷
 野球拳踊り終わってなめくじり
 返事よきキラキラネーム茉莉花
 象の耳扇いでゐるよあつぱつぱ
 箱庭にそぐわぬ物も据ゑたくて
 落蝉のごとく転がりランドセル
 ケルン積む孤独の小石ひろひあげ
 葉桜や適齢期とは幾つまで
 運任せ出たところ勝負する蚯蚓
 サングラス蚤の心臓隠しけり
 じっと待つ只じっと待つ蟻地獄
 大見得を切って父の日禁煙す
 お下がりは少し大きめ更衣
 誉められて挿し木となりし額の花
 梅雨寒の廃屋に鳴く猫五匹

遠藤真太郎
 遠藤真太郎
 大林和代
 大林和代
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 岡田廣江
 岡田廣江
 岡田廣江
 加藤潤子
 加藤潤子
 加藤潤子
 北熊紀生
 北熊紀生
 木村 浩
 木村 浩
 金城正則
 金城正則
 金城正則
 久我正明
 久我正明
 久我正明
 工藤泰子
 工藤泰子
 工藤泰子
 桑田愛子
 桑田愛子
 小林英昭
 小林英昭
 白井道義
 白井道義
 白井道義
 鈴鹿洋子
 鈴鹿洋子

雀数える夢のようでそうである時間	鈴木和枝
南瓜の蔓赤子がどうも気になるらしい	鈴木和枝
村雨や中途半端に破れ傘	高田敏男
揚雲雀よりも高さをドローン行く	高田敏男
時計草御八つの時間ばかり指し	高田敏男
夏瘦をしたと巨乳の友のいふ	高橋きのこ
盆の月夫の生命線の長し	高橋きのこ
ガーベラのごとく笑おうスマホ置き	高橋きのこ
気の合ふて今年も同じ扇子かな	竹下和宏
痩せ薬飲みつ視てゐる糸蜻蛉	竹下和宏
限界の隠し技識る水着の娘	竹下和宏
十薬は健康寿命を延ばしけり	田中 勇
この夏の好物となりアイスティー	田中 勇
梅雨明や卒寿の夫と旅に出る	田中早苗
車椅子押して真夏の水族館	田中早苗
鬼笑ふホテルでビールを来年も	田中早苗
生中継の大リーグ横目にトマト切る	田中やすあき
寝冷子の百八十度西を向く	田中やすあき
人はなぜバナナの皮で滑るのか	谷本 宴
家中の時計の針が遅る夏	谷本 宴
しばらくは胸に汗かく季節かな	谷本 宴
惚けに効く薬をさがす薬の日	田村米生
真向うて窓のすだれはちよつと上げ	田村米生
梅雨空に疲労の傘を折りたたむ	月城花風
誰よりも大粒を選び苺摘む	月城花風
地上絵の航空写真や茄子嚙る	月城花風
黒南風や蠅もごくごくアルコール	土屋泰山
ベランダに吊りたいラベンダーの花	土屋泰山
蟻の列先頭倣い千鳥足	土屋泰山
ゆく夏に又会えるよね念をおし	堤 宏文
寝冷えして恋の熱冷め夢も覚め	堤 宏文
避暑の旅永遠(とわ)の旅路にならぬよに	堤 宏文
本心の純白光る半夏生	長井知則
訳聴くも待つ事はせず青田刈り	長井知則
白絣キャンパスにして人描く	長井知則
戻り梅雨今年一番欲しいもの	花岡直樹
順番をよく打ち合わせ蟬生まる	花岡直樹
またかまたかと怒りに狂うビアの泡	花岡直樹

おにぎりに丸と三角七変化

菖蒲園ぶらぶらなれど七千歩

除草剤植田の空に放りけり

川下で形代掬ふといふ時代

爪赤き足もて入る禊川

愛犬に曳かれて潜る茅の輪かな

くたびれただけの一日蝸牛

一つつつ眠らせるかに梅漬ける

七夕や世界平和と短冊に

夏瘦は叶わぬ願い夏太り

水虫を我が長年の友とする

涼風がよく通るとも閑散とも

路地の塀捕虫網だけ歩いている

クーラーつける意識失う少し前

どくだみの実効支配の国旗めく

炎帝と戦覚悟の地下出口

ダリの貌ムンクの口となる大蛇

而して蝙蝠の空うやむやに

耳垂れマークびつくりマーク雷はしる

麦飯を食べて生き延ぶ昭和の日

かたつむり先祖の墓をなめて行く

楠の木は大きな日傘その下に

カーテンを開けるとそこに守宮の目

雲海は俗世を隠しきつてゐる

懐かしいグラジオラスにラジオとは

じりじりは暑さのことで油蟬

予想した馬は来たらず風涼し

持て余す暇を抱えて三尺寝

炎天を来て吐く息を持て余す

いずれかが介護に遣り鰻食ふ

生きるためほうたる苦き水も飲む

今日もまた記憶曖昧暑さ負け

グラスにはストロー二本ソーダ水

少年の籠一杯にソーダ水

水遣ったばかりの庭の夕立かな

浜田イツミ

浜田イツミ

浜田イツミ

久松久子

久松久子

久松久子

日根野聖子

日根野聖子

日根野聖子

細川岩男

細川岩男

細川岩男

南とんぼ

南とんぼ

峰崎成規

峰崎成規

椋本望生

椋本望生

椋本望生

村松道夫

村松道夫

森岡香代子

森岡香代子

八木 健

八木 健

八木 健

八塚一青

八塚一青

柳 紅生

柳 紅生

柳村光寛

柳村光寛

柳村光寛

山内 更

山内 更

花嫁はあじさい色のワンピース	山岡純子
梅雨晴にアガパンサスの青はじけ	山岡純子
一票に国を案ずる冷奴	山岡純子
二頭身首は凝らぬか扇風機	山下正純
万物に定めありて七変化	山下正純
あぢさみの本当の花は顔見せず	山田真佐子
鯖寿司の十四五本も手土産に	山田真佐子
ナイター観て宿題できず泣いたあの夜	山田真佐子
銀行の裏で育った今年竹	山本 賜
四方から工事の音の夏休	山本 賜
初浴衣孫の手首の細きこと	横山洋子
夏草や地藏の頭撫でつづけ	横山洋子
炎昼の街に響くや解体音	横山洋子
貴婦人になつたつもりの夏帽子	吉川正紀子
見上げても届かぬところに朴の花	吉川正紀子
この苦さ昔の味や夏みかん	吉川正紀子
炎帝や聞くみみ持たぬ人の激	吉原瑞雲
草刈るや怨嗟を放つ虫の群れ	吉原瑞雲
つき出たる腹が砂搔く五月場所	吉原瑞雲
墓石の彫りの深きに雨蛙	渡部美香
篠笛のとぎれとぎれに月涼し	渡部美香
ロボットがボーイフレンド友の夏	和田のり子
ロボットがテレビをつける夏初	和田のり子
当たり棒あればいいねとアイス食む	和田のり子